

博山炉の形成過程における北方香炉の誕生と 西域香炉との融合

長 村 真 吾

はじめに

- 一．博山炉形成過程に関する諸説
- 二．中国の香文化と南方香炉の存在
- 三．南方豆形香炉の北方への流入と北方香炉の誕生
- 四．北方香炉と西域香炉との融合とその時期

おわりに

はじめに

1968年、河北省満城県陵山の中山王劉勝（前113年没）夫妻の墓から図1や図2に示した香炉が発掘された¹。このような山岳意匠が施されている蓋を有し、細い脚部によって炉身が支えられている香炉のことを、一般に博山炉と呼んでいる。また、承盤が付帯しているものもある。

この博山炉は漢代の墓葬から数多く出土しており、大変流行した用具であった。それにも関わらず、当時の文献史料には、香炉に関する記述がほとんど存在せず、その研究は困難を極めている。中でも、最大の謎は出現当初から完成された形態であることである。博山炉の形態は出現当初から後漢末まで、その意匠に多少変化はあるものの、基本形式を維持しており、どのように博山炉が誕生したのか、その形成過程がはっきりしないのである。そこで、本論文は博山炉の形成過程を明らかにすることが目的である。

一．博山炉形成過程に関する諸説

博山炉の形成過程に関しては諸説存在する。そこで、研究史を整理・検討する必要がある。

まずは豆説である。小杉一雄氏は、炉身を一脚で支えているという博山炉の特徴から、新しく創案されたものではなく、中国石器時代の標識的土器とされる豆こそ、この香炉の基本形であったとされている。氏の説をまとめると以下のようなものである。薫香の風習は、漢代以前には文献記録

¹ 樋口 [1988] p88参照。

が存在せず、香炉の遺物もないことから、漢代から始まったものであり、そうした新しい風習が起こったので、従来からある豆が、香炉の代用品として転用された。しかし、豆の蓋には穴がないので、既存の蓋に対して香を焚くに応じた加工をする必要があった。そうした従来用途とは異なる加工を施した際に、従来は必要なかった山岳意匠を施すこともあり得る。こうして作られた器物が博山炉である²。また、杉本憲司氏は、豆そのものの一部を変えて出来たものが博山炉であると述べておられる³。

確かに博山炉は、蓋を外した形態が豆に酷似しており、香炉と豆との接点を見出したことは、博山炉研究の上で大きな成果であった。しかし、小杉氏は、薫香の風習が漢代に始まったとされたが、それが香炉の出現を以て始まったと考えるならば、出土状況から見て戦国末に開始されたと思われる。だが、氏は戦国時代末に登場した香炉を視野に入れていない。博山炉形成過程を説明するに際して戦国時代の香炉と博山炉との関係を検討しないというのは分析が不十分である。また、杉本氏は、豆そのものの一部を変えて博山炉を作り出したという具体的な根拠を提示しておられない。さらに言えば、漢代の墓葬から出土した豆の数は、戦国以前のそれから出土した数に比べて激減している。故に、豆の一部を変えて博山炉を完成させたとは考えにくい。

次に、全榮來氏は「香炉の起源と型式変遷」という論文の中で、新たな説を発表された。まず氏は、漢代に出土した200余点の香炉中、出土地の確実な148点の香炉を細かく分類された上で、香炉には南方系と北方系があることを述べられた。そして、南方では豆形香炉が、そして北方では西域からの香料の流入により、3足に網格文透孔を穿ち、柄を付けた行炉（図3）、鳥形盒の上体を蓋にし、そこに透孔を穿った鳥形香炉（図4）のような、豆形ではない多様な香炉が形成され、これらの香炉と、南方で誕生した円錐形香炉（図5）とが折衷され、さらに戦国時代に誕生した鳥柱盆（図6）が合わさることで、博山炉承盤が完成し、その定型化は満城漢墓の頃、つまり前漢中期であると述べておられる⁴。

全氏が、香炉に関する資料を細かく分類し、香炉に南方系と北方系があることを指摘され、博山炉形成過程において、南方香炉との関係に着目されたのは、真に卓見であると思われる。しかし、各香炉の出現時期に問題がある。氏の説では、博山炉と行炉・鳥形香炉・鳥柱盆・南方の円錐形香炉では後者の方が早い時期に出現したことになるが、実際には、氏が自ら明らかにしているように、鳥柱盆を除いては、ほぼ同時期の前漢中期に出現しているのである。同時代の器物に関して、先入観によって並べ替えることは危険であり、氏の述べている器物が融合して博山炉が完成したとは考えにくい。さらに、鳥柱盆は漢代における出土例がないのである。したがって、承盤も鳥柱盆を参考に作られたとは考えにくい。

また、徐廷緑氏は、博山炉形成過程における西域香炉の影響を述べられた。氏は、まず博山炉が、蓋を外すと南方香炉に影響を受けた江北の初期香炉（図7）と同様に豆になることから、豆

² 小杉 [1959] p80-82参照。

³ 杉本 [1963]

⁴ 全榮來 [1996] 参照。

形の香炉の延長線上にあるとされた。そして、戦国末に西域の香料が流入したため、当時の匠が西域の香炉（図8）を参考に博山炉を製作し、その年代は前3世紀末の秦漢代初期頃から前漢中期とされた⁵。

徐氏は、全氏と同様に、博山炉は南方香炉の延長線上にあると考えたが、さらに一步進めて、西域香炉との関係に着目したことは、真に卓見であると思われる。しかし、氏は、西域から香料が流入したのを戦国末、南方香炉の誕生を戦国末、江北の初期香炉の誕生を戦国末から前漢初期、博山炉の誕生を秦漢初期としているが、戦国末に西域から香料が流入したという文献史料も、出土遺物も見つかっていない。また、博山炉に関しても、秦漢初期のものは出土していない。また、氏が南方香炉の影響を受けて戦国末から前漢初期の間に出現したとした初期香炉は満城漢墓から出土した物であり、この墓葬からは博山炉（図1・2）も出土している。もし、博山炉がこの江北の初期香炉の影響を受けたと言うのであれば、博山炉が出現した武帝期よりも古い江北出土の初期香炉を提示すべきであり、これでは、南方香炉・江北の初期香炉・博山炉の三者の関係が明確になっているとは言い難い。つまり、年代比定を資料から正確に行っているとは言えず、推測の域を出ないのである。

このように従来の研究は、出土遺物の少なさや年代比定の曖昧さから、豆・南方香炉・江北の初期香炉・博山炉・西域香炉の相互関係が明確には分からず、博山炉の形成過程を述べる上で多くの矛盾が生じていた。そこで、筆者は新たに出土した香炉をもとに、従来の香炉の年代比定を再検討することによって、博山炉の形成過程を明らかにしたい⁶。

二．中国の香文化と南方香炉の存在

1．中国の香文化の誕生と南方香料

香を焚くということは「香り」を得ることが期待されていると思われるが、これらは古くから祭祀の場で多く用いられていた。『周礼』鬱人には、

鬱人、裸器⁷を掌る。凡そ祭祀・賓客の裸事⁸に、鬱鬯を和し、以て彝に實たして之を陳ぬ。

（鬱人、掌裸器。凡祭祀・賓客之裸事、和鬱鬯以實彝而陳之。）

とあり、鬱鬯とは、鄭玄の注に「鬱金を築き之を煮て以て鬯酒に和す。」（築鬱金煮之以和鬯酒。）とある。つまり、鬱金という香草をつきくだいて、煮て、それを黒きび酒に混ぜて香りをつけた酒を祭祀の場で使用していた。また『尚書』虞書・舜典の馬融の注には、

祭時、柴を積み牲を其の上に加へて之を燔す。（祭時、積柴加牲其上而燔之。）

⁵ 徐廷緑著・金容権訳 [2005] p26・198・233参照。

⁶ 小杉氏・全氏・徐氏の説の模式図を、筆者の説の模式図と共に、本稿の「博山炉形成過程の諸説の模式図」に載せているので、参考のこと。

⁷ 裸器とは、『周礼』鄭玄注に「裸器は彝及び舟と瓚とを謂ふ。」（裸器謂彝及舟與瓚。）とあり、彝は酒を入れる器、舟は酒を入れる器を置く台、瓚は酒を注ぐ柄杓のことである。

⁸ 裸とは『説文解字』に「裸、灌祭なり。」（裸、灌祭。）とあるように、酒を地に注いで神の降臨を願う祭祀である。

とあり、祭事には柴を燃やし、その上に載せた犠牲獣の肉の焼ける香りを用いていたのである。

このように、中国では古くから「香り」を祭祀の場で使用していたのである。しかし、これらは香炉を使用して香りを得たというわけではない。小杉一雄氏が「熏香などということは要するに灰を盛る器さえあれば、何時何処でも可能なのである。今日のように特に厚い雲母板を使うような方法でさえ、普通の火鉢でも焚こうと思えば焚けるのである。」⁹と述べておられるように、香炉専用の器物がなくても香を焚くことは可能ではあるが、熏香の習慣が確立したと考えられるのは、香をより効果的に焚くための「香炉」という、熏香専用の器物が誕生した時であり、香炉の出土状況から考えて戦国晩期と思われる。また、その出土地は、中国南部、主に広東・広西・湖南の珠江流域およびその周辺に集中しており¹⁰、北方において戦国時代の香炉の出土例が確認されていないことから、中国における香文化の起源は南方にあったと考えられる。

南方で使用されていた香料としては、馬王堆漢墓出土の香炉（図9）の中から茅類の植物が発見された¹¹。また、長沙楚墓からも同様に、植物の燃え残りが発見された（図10）。つまり、出現当初の南方香炉で使用された香料は茅類の植物であることが分かる。

ここで、文献史料を見てみると『淮南子』説山訓には、

潔白なるを以て汚辱を為すは、譬へば猶ほ沐浴して溷を抒み、薰燧して兔を負ふがごとし。

（以潔白為汚辱、譬猶沐浴而抒溷、薰燧而負兔。）

とあり、「薰燧」という語が出てくる。これは香を焚くという意味に解釈されているが、ここでいう「薰」とは薫草のことである。薫草は『春秋左氏伝』僖公四年に、

一薰一蕕、十年にして尚猶ほ臭有るがごとし。（一薰一蕕、十年尚猶有臭。）

とあり、注に、

薰、香草なり。蕕、臭草なり。（薰、香草。蕕、臭草。）

とあるように、春秋時代から香草として知られていた。また、『山海経』西山経に、

草有り。名づけて薫草と曰ふ。麻葉にして方莖、赤華にして黒實、臭は麝蕪の如し。（有草焉。名曰薫草。麻葉而方莖、赤華而黒實、臭如麝蕪。）

とあり、麻のような葉で莖が角張っていることが分かる。そして、この薫草の用途であるが、『漢書』龔舍伝に、「薰は香を以て自ら焼く。」（薰以香自燒。）とあり、これは、薫草は香りを持っているばかりに焼かれる災いに遭うという意味で、才能のある者が、その才能を包み隠すことが出来ないで、返ってその身を害する喩えとして使われている。このことから、薫草は焼いて使用されており、それは喩え話になるほど漢代人にとって当前の使用法であったと考えられる。

これらの史料から、当時の中国に「薫草」という、良い香りのする、麻のような葉を持った植物を燃やす習俗があることが分かる。よって、文献史料に記されている「薫草」のような植物が、

⁹ 小杉 [1959] p81

¹⁰ 長沙楚墓だけでも、香炉は26個出土しており、前漢初期の北方の香炉件数を上回っている。湖南省博物館他 [2000] (上) p141を参照。

¹¹ 孫機 [1991] p359 図版90を参照。

出現当初の南方香炉で使用された香料であったと考えられる。

2. 南方豆形香炉の存在

先に述べたように、香炉は香料をより効果的に焚くために作られた。では、薫草を焚くための南方香炉はどのような特徴を備えたものであったのだろうか。

南方で出土した香炉の中で、最古と思われる香炉は、長沙で発掘された戦国時代晩期の図11のものである。この図11のような形態の香炉は、戦国末から前漢初期にかけて、中国の南方において数多く発掘されている。特徴としては、材質は陶器であり、蓋に三角形の孔が多く穿たれている。また、炉身に角があるため、炉身が浅い作りになっている。

孫機氏の研究によると、南方香炉が、炉身が浅く、蓋が扁平で三角形の孔が多く穿たれているのは、通気性を良くして、各種の香草を十分に燃焼させるためであるという¹²。つまり、南方で出現した香炉は薫草を焚くのに適した作りになっていたのである。

しかし、この南方香炉は薫香の風習の誕生によって、新たに作り出されたものではなかった。この香炉の祖形が何であるかということに関しては、全榮來氏が初期の香炉について「出現期の始原的な燻炉の型式は、円筒形の高台が付く盃形器身の蓋に幾何学的な穴を開けた、いわゆる豆形である。これは伝統的に受け継がれている豆の形態をそのまま利用したもので、そこに燻炉としての機能を付け加えたものに過ぎなかった。」¹³と述べておられるように、豆であると言える。

このように、出現当初の南方香炉は既存の器物である豆を利用したものであった。しかし、その形態は薫草を焚くのに適していたため、戦国末から前漢初期にかけて同じ形態のものが多く作られた。つまり、その形態が香炉として定型化されたのである。そして、このような戦国末から前漢初期にかけて流行した陶製の香炉を「南方豆形香炉」と呼ぶことにする。

以上のように、薫草を焚くための香炉は戦国末の南方で、豆を参考にして誕生し、戦国末から前漢初期に南方の諸地域において流行し、以後、香炉の基本形となったのである。

三. 南方豆形香炉の北方への流入と北方香炉の誕生

1. 南方豆形香炉の北方への流入

博山炉は河北・山西・陝西などの中国の北方において誕生したと考えられる。しかし、博山炉が誕生する以前の北方において香炉が存在したのかという問題は、長い間謎とされてきた。杉本氏も南方豆形香炉に関して「前漢時代のごく初期、古くみて戦国時代の末から前漢時代の中頃にかけて、長沙、広州等の揚子江より南の方にみられ、北にはまだ出土例がない。」と述べられ¹⁴、全榮來氏の「中国式香爐の型式別・地区別分布」の表にも、前漢中期以前の北方から南方豆形香

¹² 孫機 [1991] p360

¹³ 全榮來 [1996] 参照。

¹⁴ 杉本 [1963]

炉が出土した例は示されていない¹⁵。また、徐廷緑氏も銅製の北方初期香炉は提示しているものの、それは満城漢墓のものであり、あくまでも形態の類似性から博山炉よりも早い時期の香炉であると推測されているにすぎない¹⁶。

このように、これまでは南方で誕生した豆形香炉が北方で発見されていなかったため、北方の香文化¹⁷が南方から伝わったのか、それとも他の地域から伝わったのかが分からず、北方香炉と南方香炉の形態の類似から、南方豆形香炉が北方初期香炉に影響を与えたのではないかと推測することしか出来なかった。しかし、前漢早期の墓葬である西安の龍首原漢墓から図12のような香炉が発見された。これは蓋のみであるが、陶製であり、蓋には三角形の孔が多く穿たれている。この図12の香炉は広州で発見された前漢早期の香炉（図13）と同じような形の蓋を有しており、恐らく、この香炉と同様に、南方豆形香炉であることが分かる。つまり、これは前漢早期に南方豆形香炉が北方に存在し、北方の香文化が南方から伝わったという確かな証拠である。

また図14に掲げた香炉は完全な状態で発見され、同じく陶製であり、三角形の孔が多く穿たれているので、南方系香炉と考えられる。しかし、全体的に丸みを帯びており、蓋や炉身に角がある南方豆形香炉とは多少形態が異なっている。そして、図15は山東省で出土した前漢早期の香炉であるが、材質が銅製ではあるものの、器物の全体像は、龍首原漢墓で発見された図14の香炉と類似している。これらの香炉は前漢早期のものであるが、図14のような全体的に丸みを帯びた香炉が南方で出土していないことから、北方に南方豆形香炉が流入した後に作られたと考えられる。また、銅製のものも図14のように丸みを帯びていることから、同様に北方で作られたと考えられる。そして、景帝期には、この型式の香炉に承盤が付帯した（図16）。承盤が付帯した香炉はこれが最も古いものである。承盤が付帯した理由であるが、承盤が付帯している器物としては他にも灯が存在する（図17）。この2つの器物に共通するのは火を使うということであり、恐らく、安全性を高めるために水を入れる承盤を付帯したのだろう。また、前漢中期の茂陵から発見された香炉（図18）は、材質が銅製であり、承盤も付帯しているが、特に龍首原漢墓の図14の香炉と類似している。つまり、戦国時代に出現した南方豆形香炉は、香文化とともに前漢初期において北方に伝わり、そこで器形に変化が生じた。全体的に丸みを帯びた形態のものが作られ、材質も陶器だけではなく、銅器のものも作られた。そして、景帝期には、安全性を高めるために承盤を付帯したのである。

このように、南方豆形香炉の北方への流入は、北方に香文化を伝え、以後の流行の基礎を確立する上で重要な転機であった。そして、前漢の初期において、南方豆形香炉の影響を受けた北方の初期香炉は、その形態を徐々に変化させたのである。

¹⁵ 全榮來 [1996] 表2を参照。

¹⁶ 徐廷緑著・金容権訳 [2005] p197

¹⁷ 本稿で言う香文化とは、香料を、香炉を用いて焚く習俗のことである。

2. 北方初期樹脂類香料用香炉の誕生

前漢早期に南方から伝わった図12の香炉であるが、これは蓋しか発見されていない。しかし、広州で発見された前漢早期の香炉（図13）が同じような形の蓋を有しており、恐らく、図12の香炉と同様のものであると判断できる。この香炉の形態は炉身が浅く、蓋が扁平という特徴を持つことから、香料は薫草を用いていたと考えられる。

しかし、図14の香炉は、先に述べたように図12・13の香炉とは異なり、全体に丸みを帯びている。炉身に注目して考えると、丸みを帯びることで、今までの香炉よりも炉身が深くなっている。他の前漢早期の香炉（図15・16）を見ても、炉身に丸みを持たせており、図14よりもさらに炉身の深さを増す工夫が施されている。

このような香炉の特徴に関して、孫機氏は、樹脂類香料¹⁸を焚くためであると述べておられる。樹脂類香料は薫草とは薫香方法が異なる。薫草の場合は薫草を乾燥させ、それ自身を燃やす方法を採る。そのため、薫草が燃えやすいように炉身を浅く作り、蓋を扁平にし、大きな孔を多く穿たなければならなかった。しかし、樹脂類香料は炭火を焚いて、その上に樹脂類香料の粉末を載せる必要があり、また、緩慢に燃やすために、炭を多くする必要があった。そのために、炭火を焚きやすいように炉身を深くする工夫を施さなければならなかった¹⁹。

このことから考えると、図14・15・16・18の香炉は樹脂類香料を焚くための香炉であると判断できる。また、前漢早期における樹脂類香料専用の香炉は、孫機氏は提示していないが、図15と同様の形態である図19の香炉に関して、氏は樹脂類香料を焚くための香炉であるとされている²⁰。つまり、孫機氏の言われる樹脂類香料専用の豆形香炉は、氏の言われる以前の前漢早期に存在していたのである。このように北方において誕生した樹脂類香料を焚くための香炉を「北方初期樹脂類香料用香炉」と呼ぶ。

しかし、戦国末に誕生した南方豆形香炉は薫草を焚くためのものであり、樹脂類香料を焚いた形跡がなく、当時の中国には存在しなかったと思われる。時代は下るが、晋の張華が記したと言われている『博物志』巻2・異産には、

漢武帝の時、弱水の西の國に人の毛車に乗りて以て弱水を渡り、香を來獻する者有り。（漢武帝時、弱水西國有人乘毛車以渡弱水、來獻香者。）

とあり、漢の武帝の頃に西域から来訪し、香を献上した者がいたとある。また『後漢書』西域伝・大秦に、

諸香を合會し、其の汁を煎じて以て蘇合を為る。凡そ外國の諸珍異は皆焉より出づ。（合會諸香、煎其汁以為蘇合。凡外國諸珍異皆出焉。）

とあり、後漢には西域の香料がすでに知られていたことが分かる。これらの記述から、香料の来源は西域であると考えられる。

¹⁸ 樹脂類香料とは、植物から採れる樹脂を固めて作った香料のことである。

¹⁹ 孫機 [1991] p360-361参照。

²⁰ 孫機 [1991] p361

西域での香料の使用は大変古く、焚香の目的で香を最も早く使用しはじめた地域は、中東南部で、その時期は紀元前5000年前まで溯る。焼香の材料としては主に乳香と没薬という樹脂類香料を使用し、香を焚く目的は天の「神と交通する」ためのものと知られている。実際に古代中東では神に祈る時や祭礼を行う時、必ず香を吸い、香が天にいる神に届いてこそ、初めて利き目があると信じた。彼らが香を「神の食べ物」と呼んだのもそのためである²¹。このように西域ではかなり古くから香料を用いており、それは中国の薫草とは違い、樹脂類香料であった。つまり、この樹脂類香料を用いた薫香が前漢早期、西域から中国に流入したのである。張騫の西域派遣以前の前漢早期にいかなるルートを通してこの樹脂類香料の薫香が中国にもたらされたのであろうか。

実は近年、アルタイの後期スキタイ時代の古墳群であるパジリク3号墳と5号墳（前5～4世紀）から、中国産の絹織物が出土しており、6号墳からは中国の戦国時代の鏡が出土していることから、張騫が開いたとされるオアシスルートよりも早い時期から中国人はアルタイ地方を介して西域と交流していたことが明らかになってきた²²。恐らく、西域の香料もアルタイ地方を介して前漢早期の北方に流入したと思われる。徐氏は、西域香料の流入を戦国末とされたが²³、確かに戦国末にはアルタイ地方を介して西域の物品が流入していたが、現在、北方初期樹脂類香料用香炉が前漢早期にしか出土していないため、香料の流入は前漢早期と判断すべきである。

このように、前漢早期において、北方に流入した南方豆形香炉は、アルタイ地方を介する交易により流入した樹脂類香料によって、炉身が深くなるという転機が訪れたのである。

四．北方香炉と西域香炉との融合とその時期

1．博山炉形成の時期

これまでに、戦国末に南方において薫香の風習が始まり、南方豆形香炉が作られた。そして、それが前漢初期に北方に伝わり、北方において、西域の樹脂類香料がアルタイ地方を介して流入したために、炉身が深くなるという器形変化が生じたことを述べた。しかし、これらは山形の蓋を持っておらず、蓋以外の要素は博山炉に似ているものの、博山炉ではないのである。では博山炉はいつ頃誕生したのだろうか。

博山炉の出現時期がいつであるかに関して、徐廷緑氏は、紀元前3世紀末の秦漢代初めから紀元前2世紀末の前漢中期であると述べておられる²⁴。氏が最も古いと考えている博山炉は、ワシントン美術館所蔵博山炉（図21）である。この博山炉の特徴は、緑松石を象嵌していることであり、このような宝石を象嵌した博山炉は他に出土例がない。この博山炉の年代は、水野清一氏が

²¹ 徐廷緑著・金容権訳 [2005] p224

²² 林 [2007] p138・徐廷緑著・金容権訳 [2005] p219また、アルタイ地方の交易に関しては、図20参照のこと。（徐廷緑著・金容権訳 [2005] p219、図181より抜粋。）

²³ 徐廷緑著・金容権訳 [2005] p26

²⁴ 徐廷緑著・金容権訳 [2005] p199

秦代まで遡らないまでも、漢初を下るまいと述べておられる²⁵。

このように、ワシントン美術館所蔵博山炉は前漢初期のものと推定されている。しかし、この博山炉は残念ながら、国外の美術館に所蔵されており、正確な発掘記録と出土地は不明である。したがって、この博山炉が果たして彼らの述べるように前漢初期のものであるかは即断できないのである。

他の博山炉と異なる点は、先に述べたように宝石装飾である。このような宝石を象嵌した器物は、確かに前漢早期に出土している。図22は河北で出土した前漢早期の金銀玉象嵌筒型金具であるが、緑松石などの菱形と円形の石を規則的に象嵌している²⁶。この点では、彼らの説は正しいと思われるが、実は、このような器物は、前漢中後期、後漢時代を通じて見られるのである。例えば、前漢中期の墓葬である河北省の満城漢墓から出土した金石象嵌朱雀杯（図23）には、要所に緑松石を象嵌している²⁷。また、金銀玉象嵌筒型金具（図24）は後漢時代のものが渠浪郡から出土している。つまり、宝石が象嵌されているというだけでは、この博山炉の年代は比定できないのである。

現在出土している博山炉の中で、年代のはっきりとしているもののうち、最も古いものは、満城漢墓出土の2点（図1・2）の博山炉と武帝陵である茂陵の陪葬墓から出土した博山炉（図25）である。これら3点の博山炉はいずれも前漢の中期、武帝期に相当する。他に、これまで出土した博山炉も武帝期を遡るものは報告されていない。また、武帝の後の宣帝陵である杜陵からは博山炉の蓋が出土している（図26）。では武帝期以前はどうであるかという、武帝期以前の年代がはっきりとしている香炉は、景帝陵である陽陵出土のものがあり（図16）、これは山形の蓋を持っていないことから、博山炉ではないことが分かる。つまり、この時代には、博山炉はなかったのではないかと考えられる。これらのことから、博山炉の出現時期は前漢中期の武帝期であると思われる。

2. 西域香炉の流入と北方初期樹脂類香料用香炉との融合

博山炉はどのような香料を使用していたのかという、孫機氏は、樹脂類香料であると述べておられる。氏によると、樹脂類香料を焚くためには、炉身を深くすることの他に、緩慢に燃えるようにするために、蓋の孔を小さく、高さを高くする必要があった²⁸。博山炉は、北方の初期香炉と同様に、炉身が丸みを帯びており、深く作られている。しかも、蓋の孔が小さく、高さを高くする工夫が施されており、北方初期樹脂類香料用香炉よりも、さらに一歩進んだ樹脂類香料専用の香炉であることが分かる。ならば、北方初期樹脂類香料用香炉から博山炉へと発展する過程において、何らかの転機が訪れたことになる。それは一体どのようなものであろうか。

²⁵ 水野 [1968] p145

²⁶ 曾布川・谷 [1998] p364

²⁷ 曾布川・谷 [1998] p360

²⁸ 孫機 [1991] p360を参照。

博山炉が誕生した武帝期の西域との関係は、シルクロードを通じて交流が盛んになった。シルクロードとは東西を結ぶ交易路であり、大きく3つの道があった。1つ目は北方の漠北路（ステップルート）であり、ステップ地帯を横断する道なので、有力な遊牧民族が現れれば、比較的容易に行動できたため、歴史的にはもっとも古くから利用された形跡がある。2つ目は中央を通る西域路（オアシスルート）であり、パミールの峻険な山々や広大な砂漠を横断せねばならないので、より困難な道であるが、これも所々に点在するオアシスを利用することによって、比較的古くから使用されていた。このオアシスルートの東半分を初めて公式に打開したのが張騫とされている。3つ目は、東南アジアを経てインドと絹貿易を行っていた南海路（マリルート）と呼ばれているルートである²⁹。『史記』大宛列伝には、

而るに漢始めて令居以西に築き、初め酒泉郡を置き以て西北國に通ず。因りて益す使を發し安息・奄蔡・黎軒・條枝・身毒國に抵る。（而漢始築令居以西、初置酒泉郡以通西北國。因益發使抵安息・奄蔡・黎軒・條枝・身毒國。）

とあり、『史記』大宛列伝に、

初め、漢使安息に至り、安息王、二萬騎を將て東界に迎へしむ。東界は王都を去ること數千里なり。行きて至る比、數十城を過ぐるに、人民相屬まること甚だ多し。漢使還りて、而して後使を發し漢使に隨ひて來らしむ。漢の廣大なるを觀、大鳥の卵及び黎軒の善き眩人を以て漢に獻ず。宛西の小國の驩潛・大益、宛東の姑師・扞采・蘇薤の屬に及ぶまで、皆漢使に隨ひて天子に獻見す。天子大いに悦ぶ。（初、漢使至安息、安息王令將二萬騎迎於東界。東界去王都數千里。行比至、過數十城、人民相屬甚多。漢使還、而後發使隨漢使來。觀漢廣大、以大鳥卵及黎軒善眩人獻于漢。及宛西小國驩潛・大益・宛東姑師・扞采・蘇薤之屬、皆隨漢使獻見天子。天子大悅。）

とあるように、武帝期以前にも西域との交易はあったが、西域との直接交流ではなかった。しかし、武帝期になると、西域諸国と直接に交易を行うようになり、様々な西域の物品が献上された。香も例外ではなく、先に挙げた『博物志』巻2・異産には、

漢武帝の時、弱水の西の國に人の毛車に乗りて以て弱水を渡り、香を來獻する者有り。（漢武帝時、弱水西國有人乘毛車以渡弱水、來獻香者。）

とあり、漢武帝の頃に西域の国の人が香をもたらしたという記述がある。この頃に博山炉は誕生したのであるが、ならば、北方初期樹脂類香料用香炉の蓋が高くなり、山岳意匠を施されるようになる転機が、この頃にあったのではないだろうか。それは、徐廷緑氏が「中国人は西域で使われる『香炉』の形態にも関心を持ったのは間違いない。なぜなら乳香と没薬を焚く彼らの香炉こそ、中国人にとって香文化にひたரசせた主要な動機と言えるからだ。」³⁰と述べておられるように、彼らが使用していた樹脂類香料を焚くための香炉であったと推測される。それでは西域香炉とは

²⁹ 長澤 [1972] p16-17-18

³⁰ 徐廷緑著・金容権訳 [2005] p228

どのようなものだったのだろうか。

残念ながら、現在、中央アジアと中東方面の古代香炉はほとんど残っていない。なぜならアレクサンドロス大王の東方遠征のために、バビロニア、ペルシアなどの文化が破壊されてしまったからである³¹。しかし、香炉の現物ではないが、幸いにも円筒印章に古代香炉が描かれていた。そこで、円筒印章に描かれている香炉から西域の香炉を見ていこうと思う。

図8は紀元前5世紀のペルシアの香炉である。この香炉は脚部が長く、円錐形の蓋を持っている。そして最も注目すべきは、蓋に山岳重畳文が刻まれていることや、図27のように蓋に鳥が留まっていることである。山岳重畳文は博山炉の要素であり、鳥が蓋に留まっている意匠や、蓋が鎖のようなもので繋がれている意匠も博山炉によく見られる（図28）。そして全体の形態が博山炉に酷似しているのである。徐廷緑氏も博山炉がペルシア香炉の影響を受けたのであれば、このような香炉が最も有力であると述べておられる³²。また、この円筒印章の時期と武帝期とでは数百年の開きがあるが、パキスタンで発掘された3世紀の香炉（図29）を見ても分かるように、ペルシア香炉の延長線上にあるということは明らかであろう³³。つまり、この形態の香炉は中央アジア周辺において絶えることなく存在していたということが窺える。

このように、北方初期樹脂類香料用香炉から博山炉へと発展していく過程には、シルクロード交易による西域香炉の流入が大きな転機となった。武帝期に西域との交易が盛んに行われるようになってから、今まで中国にはなかった蓋の高い樹脂類香料専用の香炉も、また西域から流入したのである。しかし、漢代人は西域香炉をそのまま用いたのではなく、中国に存在した北方初期樹脂類香料用香炉と西域香炉とを融合させ、樹脂類香料をより効果的に焚くための香炉を作り出した。それが所謂博山炉である。その証拠に、茂陵の陪葬墓で発見された初期博山炉（図25）の蓋には「内官造」、炉身には「寺工造」という銘文が見られる。内官は、皇帝あるいは皇族に必要な器物を製作する部署と考えられ³⁴、寺工は龍首原漢墓出土の陶製の缶（図30）に「寺工王氏十斗」という銘文があることから、これもまた、器物を製作する部署であると考えられる。つまり、この初期博山炉は、漢王朝の工房で製作されたということである。また、図25の博山炉は例外として、その他の博山炉は、南方豆形香炉や北方初期樹脂類香料用香炉と同様に、脚部が短く、西域香炉とは異なっている。これらのことは、博山炉が南方豆形香炉の延長線上にある北方初期樹脂類香料用香炉をもとに、新たに流入した西域香炉を参考にして製作されたことを如実に物語っているのである。

³¹ 徐廷緑著・金容権訳 [2005] p228-229

³² 徐廷緑著・金容権訳 [2005] p231

³³ 徐廷緑著・金容権訳 [2005] p231

³⁴ 曾布川・谷 [1998] p234

おわりに

以上、博山炉の形成過程を、出土遺物を中心に見てきたわけであるが、博山炉形成過程には大きく3つの転機があった。第1の転機は南方の薫香の風習が、香炉と共に北方に伝わったということである。戦国末に薫草を焚くために誕生した南方豆形香炉が前漢早期に北方に伝わったことによって、北方に香文化が流行する基礎を確立した。

そして、この時期に第2の転機が訪れた。それは、アルタイ地方を經由して西域の樹脂類香料が流入したことである。北方に伝わった南方豆形香炉は、そこで大きな変化を遂げた。炉身が丸みを帯びることで、深くなり、炭火を利用する樹脂類香料を焚くために適した「北方初期樹脂類香料用香炉」が誕生したのである。さらには景帝期において、安全性を高めるために承盤が付帯したのである。しかし、炉身は深くなったものの、蓋は扁平であり、依然として南方豆形香炉の特徴を色濃く持っていた。

前漢中期の武帝期になると、3度目の大きな転機が訪れた。それは、シルクロード交易によって、西域との直接交流が盛んに行われるようになり、西域の蓋の高い香炉が流入したことである。それまでは炉身は深くなったものの、蓋の高さは従来の南方豆形香炉のように扁平なものであった。しかし、この頃に蓋の高い西域の香炉が流入した。この香炉は蓋が高く、孔も小さくなっており、より通気性が悪いことから、北方初期樹脂類香料用香炉よりもさらに炭火を緩慢に燃やすことが出来たのである。そこで、漢代人は、北方初期樹脂類香料用香炉をもとに、西域香炉と融合させ、より効果的に樹脂類香料を焚くための香炉を誕生させた。それが所謂博山炉である。

このように、博山炉形成過程における3つの大きな転機によって多様な文化が融合した博山炉が誕生し、流行していったのである。

参考文献

邦文・書籍

- 小杉一雄 [1959] 『中国文様史の研究 殷周時代爬虫文様展開の系譜』 新樹社
杉本憲司 [1963] 「漢代の博山炉」 『近畿古文化論攷』 吉川弘文館
水野清一 [1968] 『秦・漢』 (世界美術全集 第13巻 中国2) 角川書店
長澤和俊 [1972] 『張騫とシルクロード』 清水書院
樋口隆康編著 [1988] 『古代中国の遺産』 (世界の大遺跡⑨) 講談社
徐廷緑著・金容権訳 [2005] 『百済金銅大香炉—古代東アジアの精神世界をたずねて—』 三修社
小田部英勝編集 [2006] 『始皇帝と彩色兵馬俑展—司馬遷『史記』の世界』 TBS テレビ・博報堂
林俊雄 [2007] 『スキタイと匈奴 遊牧の文明』 (興亡の世界史2) 講談社

邦文・論文

全榮來 [1996] 「香炉の起源と型式変遷」 (『古代文化』第48卷1号)

中文・書籍

中国社会科学院考古研究所編輯 [1980] 『滿城漢墓發掘報告』 (上・下) 文物出版社

中国社会科学院考古研究所編輯 [1981] 『廣州漢墓』 (上・下) 文物出版社

孫機 [1991] 『漢代物質文化資料圖說』 文物出版社

中国社会科学院考古研究所編著 [1993] 『漢杜陵園遺址』 科学出版社

河北省文物研究所 [1996] 『魯墓—戰国中山国国王之墓』 (上・下) 文物出版社

中国青銅器全集編輯委員会編 [1998] 『中國青銅器全集』 第12卷 秦漢 (中國美術分類全集) 文物出版社

韓保全・程林泉・韓国河編著 [1999] 『西安龍首原漢墓』 西北大学出版社

湖北九鐵路考古隊・黄冈市博物館 [1999] 「湖北蕪春楓樹林東漢墓」 (『考古學報』第2期)

湖南省博物館・湖南省文物考古研究所・長沙市博物館・長沙市文物考古研究所 [2000] 『長沙楚墓』 (上・下) 文物出版社

陝西省考古研究所編 [2001] 『漢陽陵』 重慶出版社

中文・論文

湖北九鐵路考古隊・黄冈市博物館 [1999] 「湖北蕪春楓樹林東漢墓」 (『考古學報』第2期)

参考図出典

図1 中国社会科学院考古研究所 [1980] 下 図版30・中国社会科学院考古研究所編輯 [1980] 上 p 65 図45

図2 中国社会科学院考古研究所 [1980] 下 図版175・中国社会科学院考古研究所編輯 [1980] 上 p 257 図171

図3 中国社会科学院考古研究所 [1980] 上 p67 図46

図4 中国青銅器全集編輯委員会 [1998] p125 図123

図5 中国社会科学院考古研究所 [1981] 下 図版59-1

図6 河北省文物研究所 [1996] 下 図版272-5

図7 中国社会科学院考古研究所 [1980] 上 p258 図172

図8 徐廷緑著・金容権訳 [2005] p230 図195-a

図9 孫機 [1991] p359 図版90-1

図10 湖南省博物館・湖南省文物考古研究所・長沙市博物館・長沙市文物考古研究所 [2000] 下

図版38-3

- 図11 湖南省博物館・湖南省文物考古研究所・長沙市博物館・長沙市文物考古研究所 [2000] 下
図版38-1
- 図12 韓保全・程林泉・韓国河 [1999] p46 図28-4
- 図13 中国社会科学院考古研究所 [1981] 下 図版23-5
- 図14 韓保全・程林泉・韓国河 [1999] 図版29
- 図15 中国青銅器全集編輯委員会 [1998] p120 図118
- 図16 陝西省考古研究所 [2001] 図142
- 図17 湖北京九鐵路考古隊・黃岡市博物館 [1999] p197 図19-5
- 図18 中国青銅器全集編輯委員会 [1998] p123 図121
- 図19 中国青銅器全集編輯委員会 [1998] p121 図119
- 図20 徐廷緑著・金容権訳 [2005] p219 図181
- 図21 徐廷緑著・金容権訳 [2005] p204 図160
- 図22 中国青銅器全集編輯委員会 [1998] p154 図151
- 図23 中国青銅器全集編輯委員会 [1998] p75 図73
- 図24 曾布川・谷 [1998] p171 図102
- 図25 小田部 [2006] p171 図96
- 図26 中国社会科学院考古研究所 [1993] 図版90-4
- 図27 徐廷緑著・金容権訳 [2005] p230 図195-C
- 図28 湖北京九鐵路考古隊 黃岡市博物館 [1999] p197 図19
- 図29 徐廷緑著・金容権訳 [2005] p230 図196
- 図30 韓保全・程林泉・韓国河 [1999] p32 図14-4

参考図



図1 銅錯金博山炉と炉蓋の展開図 満城1号墓出土（前漢中期）



図2 承盤付随の博山炉と炉蓋の展開図 満城2号墓出土（前漢中期）

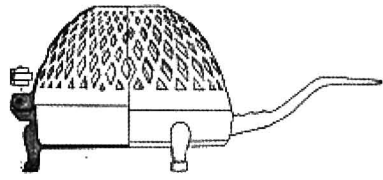


图3 行炉 满城1号墓出土（前汉中期）



图4 鳥形香炉（前汉晚期）



图5 円錐形蓋香炉（前汉中期）



图6 鳥柱盆（戦国）

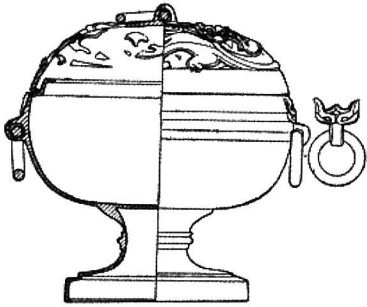


图7 江北初期香炉 满城2号墓出土（前汉中期）



图8 前5世紀ペルシア香炉図

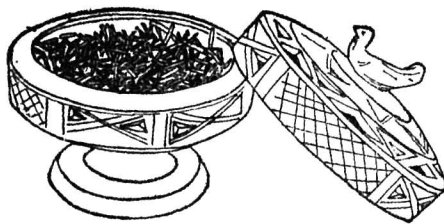


图9 馬王堆漢墓出土香炉（前汉初期）



图10 長沙楚墓出土香炉の中身（戦国晚期）



图11 長沙楚墓出土香炉（戦国晚期）

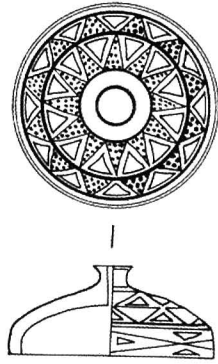


图12 龍首原漢墓出土香炉（前漢早期）



图13 広州漢墓出土豆形香炉（前漢早期）

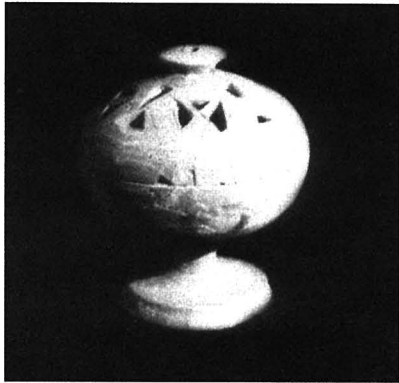


图14 龍首原漢墓出土熏炉（前漢初期）



图15 北方初期香炉（前漢早期）



图16 陽陵出土香炉（前漢前期）

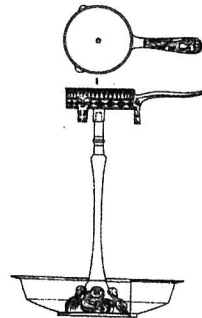


图17 承盤のある灯（後漢初期）



图18 茂陵出土香炉（前漢中期）



图19 江蘇省出土香炉（前漢中期）

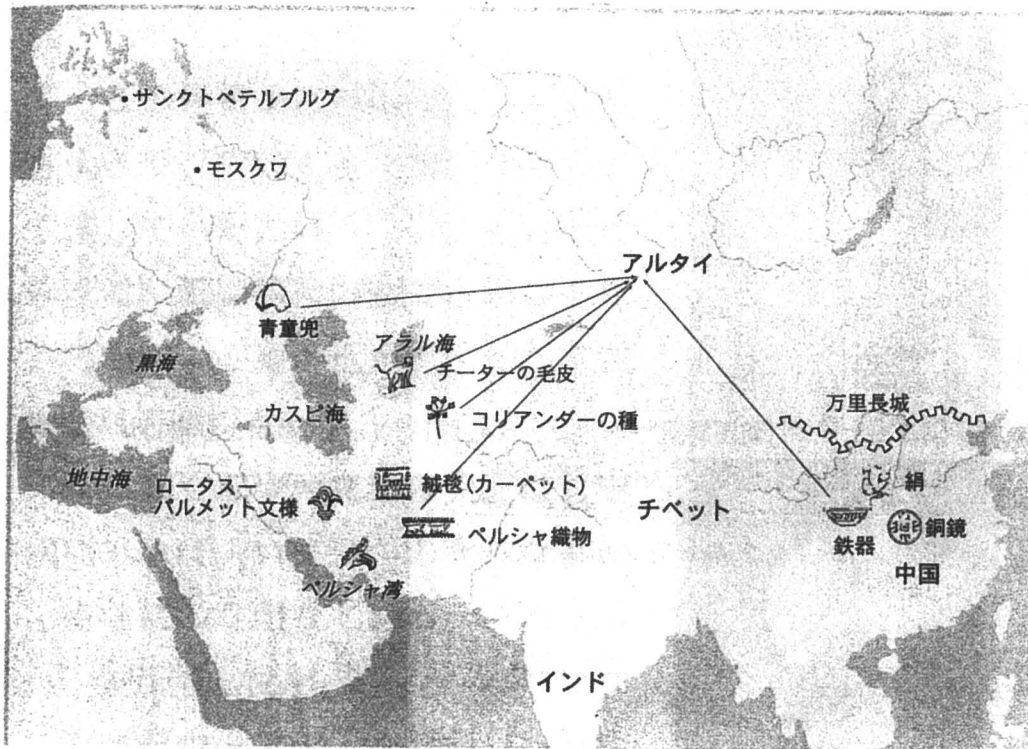


図20 パジリク古墳出土遺物分布図



図21 ワシントン美術館所蔵博山炉



図22 金銀玉象嵌筒型金具（前漢早期）



图23 金石象嵌朱雀杯
(前汉中期)

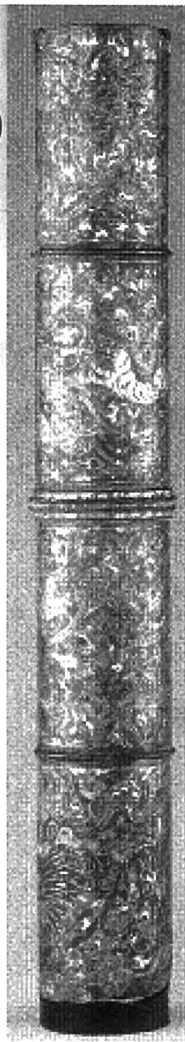


图24 金銀玉象嵌筒型金具 (後漢)

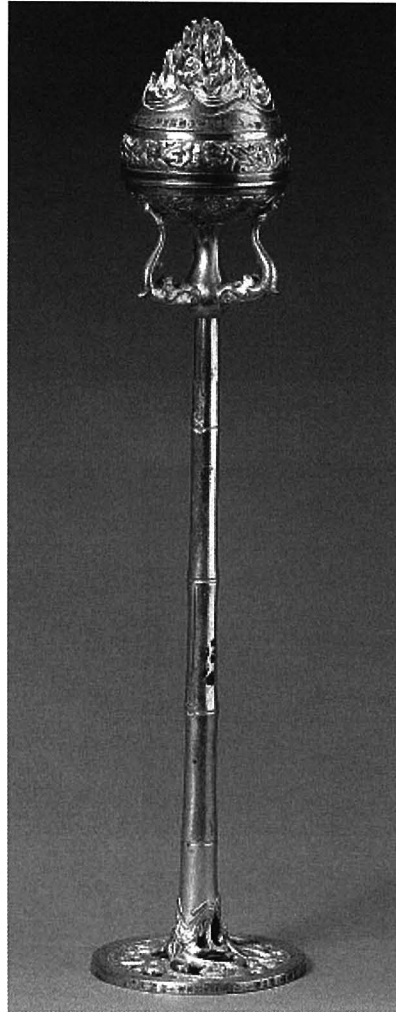


图25 茂陵陪葬墓出土竹節熏炉 (前汉中期)

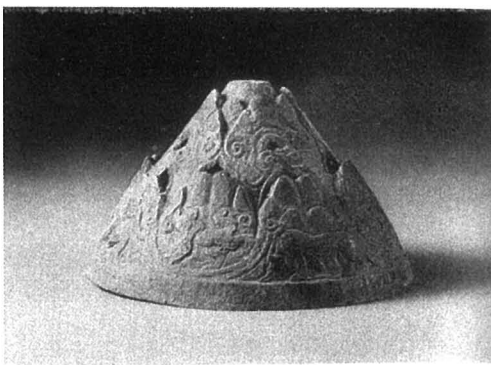


图26 杜陵出土博山炉蓋 (前汉後期)

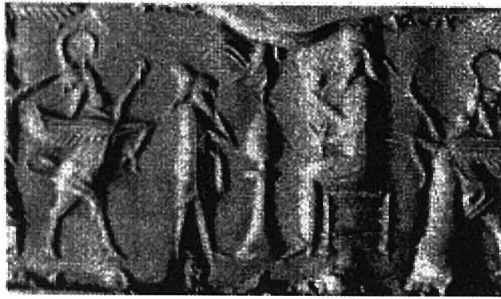


図27 前5世紀ペルシア香炉図

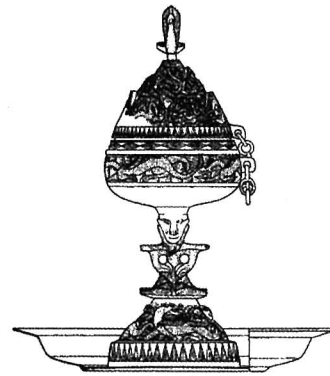


図28 鳥や鎖の意匠のある博山炉（後漢初期）



図29 パキスタン出土香炉（3世紀）

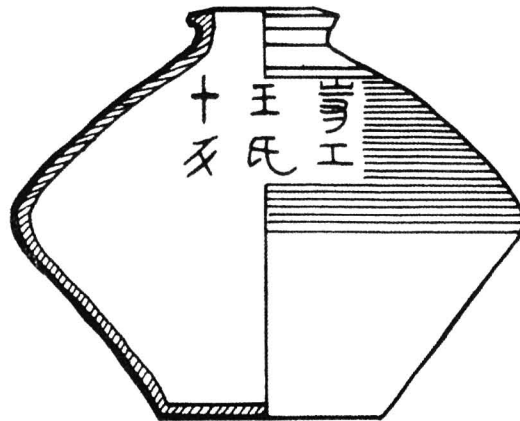
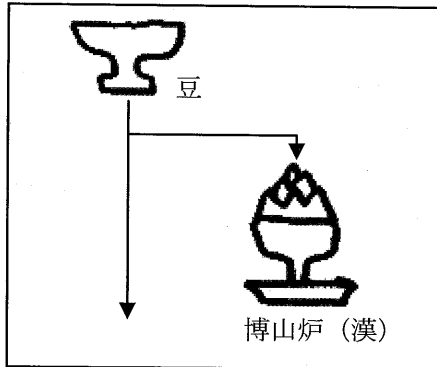


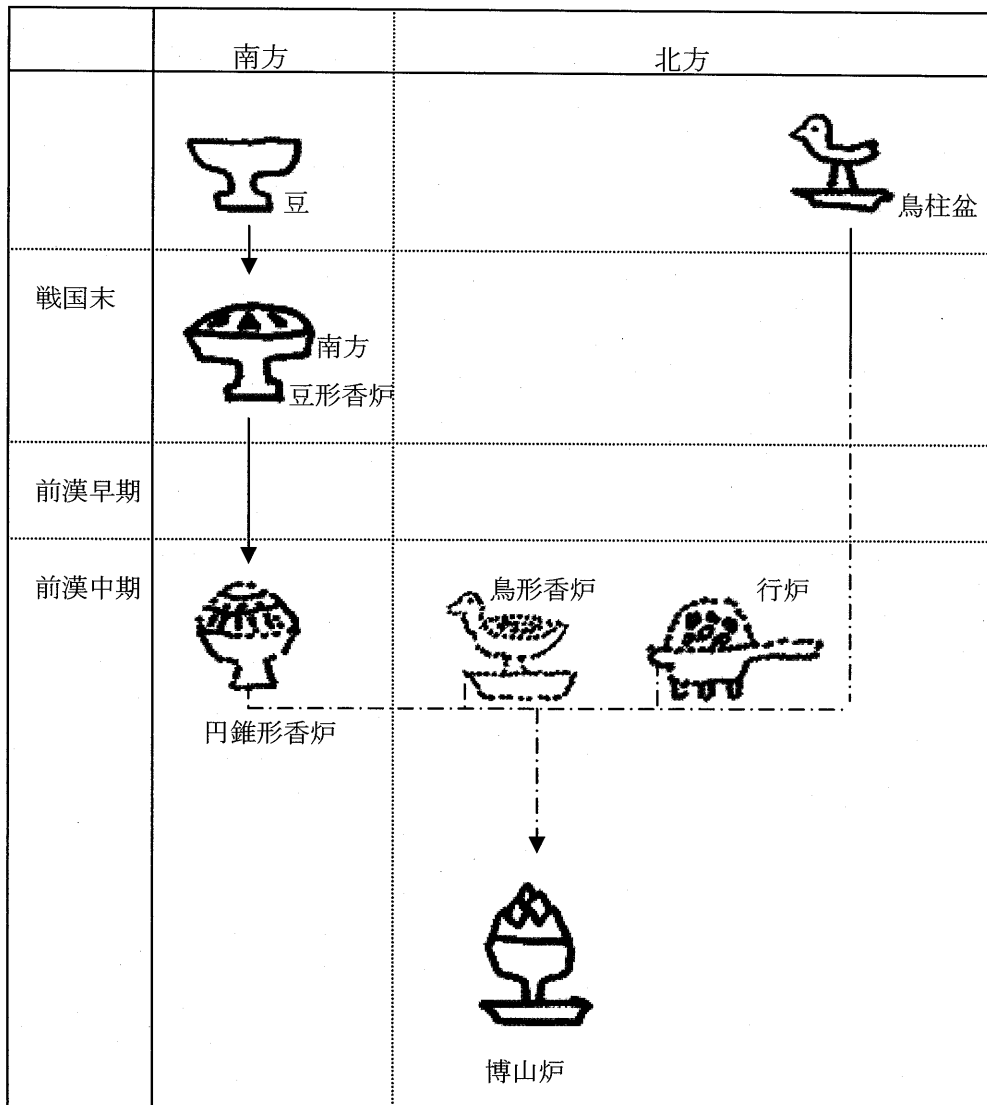
図30 「寺工」とある缶（前漢早期）

別図 博山炉形成過程の諸説の模式図 (破線は、筆者が不明確である点)

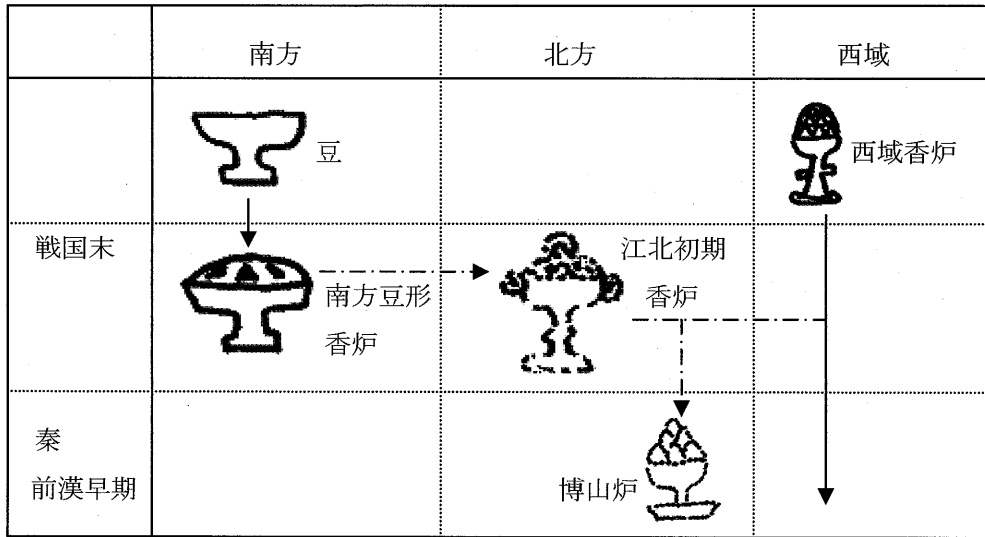
小杉氏説



全榮來氏説



徐廷緑氏説



筆者説

